平成 29 年度 神戸大学海外インターンシッププログラム

国際交流基金ブダペスト日本文化センター

就業実習報告書

国際文化学部国際文化学科2年

- 1. インターンシップ概要
- ・研修先:国際交流基金ブダペスト日本文化センター

【国際交流基金:『独立行政法人国際交流基金(The Japan Foundation)は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。』(国際交流基金 HP 日本語版(http://www.jpf.go.jp/j/about/index.html)より。)「日本の友人をふやし、世界との絆をはぐくむ」をミッションとし、そのもとで、主に ①文化芸術交流 ②日本語教育 ③日本研究・知的交流、の3つの国際交流事業を行っている。現在、世界23ヵ国に24拠点をもち、研修先のブダペスト日本文化センターは中東欧地域を担当する当該地域唯一の現地事務所である。】

- ·研修期間: 2017 (平成 29) 年 11 月 15 日 (水) ~11 月 29 日 (水) 2週間
- ・目標:
- ①事務所での就業活動を体験することで、「働く」ということはどういうことなのかを体験し、就業体験中に課されるタスクをこなす中で自らの能力や適性を客観的に認識し、これからの就職活動・キャリア形成の指針となる材料を見つける。
- ②中東欧地域における日本・日本文化・日本人の占める位置をさぐり、世界における日本人の姿や客観的評価について実際の声を通じて視座を得る。
- ③日本文化交流の最前線たる語学講座や文化紹介事業への参加を通じて、異文化受容・ 理解の積極的な姿勢を直接目にすることで、多文化共生社会の条件を考える。
- ・主な実習内容
 - ①文化事業への立ち合い・補助業務
 - ②日本語教育関連事業への立ち合い・補助業務

③研修先センター内日本語教育関連書籍管理に関する業務

2. 活動内容詳細

いた。

①文化事業への立ち合い・補助業務

本インターンシップにおいて参加させていただいた文化事業は、以下の5つであった。

- (1)研修先センター・神戸大学共催事業「産学連携講演会」
- (2)研修先センター主催事業「刀根里衣絵本原画展オープニングセレモニー及び同ワークショップ」
- (3)ハンガリー日本語教育シンポジウム及び同懇親会
- (4)日本語講座イベント「しゃべりゅんく」
- (5)研修先センター主催事業「ソプラノ・ギターデュオ 現代音楽公演」 他にも実習時間外での開催であったが、「陶芸講演会(全編ハンガリー語)」も行われて

このように、国際交流基金では多種多様な文化事業を行っている。また、これ以外にも 助成事業や協賛・協力といった形で関わっている事業もある。(1)産学連携講演会では、神 戸大学理事小川真人教授による神戸大学の産学連携に関する取り組みについての講演会 を、研修先センターが手配したハンガリー商科大学会議室にて、全編英語で行った。同大 学の学部長や教授、学生からブダペストの日本に関心を持つ学生・一般社会人も参加して 幅広い公聴者をもっての講演であった。講演後も同大学の学生から小川理事への質疑もあ ったうえ、アンケートの結果から参加者の理解や満足も深かったようである。(2)刀根里衣 絵本原画展では、ブダペスト市内にあるギャラリーを会場に行われ、親子連れを中心に多 くの来場者でにぎわっていた。(3)ハンガリー日本語教育シンポジウムでは、中東欧やドイ ツを拠点に日本語教育に携わっている教育者が集まり、日本語学習者の学習の壁の一つで ある漢字をいかに学習させていくか、研究・実践両面からの報告がなされていた。(4) 日 本語講座イベント「しゃべりゅんく」では、センターにて開講されている日本語教室の生 徒などと在ハンガリー邦人が交流した。この場で、ELTE 大学に留学している日本人学生 と仲良くなった経験から、日本人-ハンガリー人のネットワーキングだけでなく、日本人同 士のネットワーク構築の役割もはたしていそうだと感じた。(5)研修先センター主催事業 「ソプラノ・ギターデュオ 現代音楽公演」では、他のイベントとは異なり中高年の参加 者が多かったが、ブダペストの人々の芸術への関心の高さを感じた。

どのイベントでも、参加者が笑顔で満足した様子であり、センターのニーズをとらえた プログラムアレンジメントであると感じた。また、参加した方から日本語で話しかけても らう機会も多く、日本・日本文化への関心の高さや親日的な雰囲気の強さを感じることも できた。

②日本語教育関連事業への立ち合い・補助業務

日本語教育関連事業とは、センター内の会議室・図書館で行われる夜間日本語講座を柱

としたものであり、前述の「しゃべりゅんく」もその一環に当たる。今回のインターンシップでは、センター外の日本語教育現場の見学もさせていただいた。

(1)バビチ・ミハーイ高校日本語講座授業見学

バビチ・ミハーイ高校は、日本では中学校~高校にあたる年齢の生徒が通うブダペスト市内にある学校である。生徒は、入学時に第二外国語をドイツ語・フランス語・スペイン語・英語・日本語の5つの中から選び、4年間学習している。(第一外国語は英語。)今回は、学習3年目の11年生のクラスと今年の9月に入学し日本語学習を始めた9年生のクラスを見学した。ハンガリーの高校では、授業ごとに教室移動がありその先生の教室で授業を受けることや、日本語クラスの人数がおよそ15人程度であることから、日本の大学の演習・ゼミ形態の授業に近い印象を受けた。

11 年生のクラスでは、見学の前の授業で生徒たちが準備した日本語でのプレゼン発表を行い、ハンガリーの好きな街をテーマにどの学生も練習を重ねた滑らかなきれいな日本語でハンガリーの街の魅力をそれぞれ伝えてくれた。その後、小グループを作ってのフリートークの時間があり、互いに質問をし合ったが、日本語を選んだ理由として多かったのはやはり漫画アニメなどの日本のサブカルチャーであった。

9年生のクラスでは、書くことに関しては、ひらがな・カタカナの文字学習を行っている段階ではあったが、話すことに関しては事前に準備してきた質問文を用いて滑らかな会話が行えた。しかし、こちらがあちらの語彙レベルを正確に把握していなかったことに加え、こちらがハンガリー語が一切わからなかったため、あちらの要求を理解できず、直接的に日本語の理解を深める・知識を増やすということはできなった。しかし、授業自体は非常に集中した密度の濃いもので使用ベースの実践的な教育がなされていた。

どちらの教室でも、生徒が一番うまい日本語が「先生」であり、授業中もアクティビティを行うと必ず教室のあちこちから声が上がっていた。この教師と生徒の距離の近さやわからないことを恥ずかしがらず助けを求める姿勢は日本の生徒・学生と大きく違い、学習に積極的な姿勢を育てる大きな一要因でもあるように感じた。

(2) エトヴェシュ・ロラーンド大学(ELTE) 日本語学科の授業への参加

会話の授業に参加させていただいた。その授業では、ELTEへの日本人留学生をゲストに招いて日本人1:ハンガリー人学生2の小グループを組み、その中で話したことを全体に向けて発するという流れで、①自己紹介②アイスブレイキング③ディスカッションの3コンテンツを行った。②のアイスブレイキングでは「yarigai」を探す「FINDING YOR IKIGAI」という図を用いて自分の好きなこと・得意なことを話し合った。③のディスカッションは、日本語母語話者の話し方の特徴をトピックとして、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の音声ダイアログを材料に議論・発表を行った。自分のグループには、日本に一年間留学していたという学生がおり、その経験をもとに「日本人には皮肉が通じない」

や「日本人は相槌が多い」などの考えを伝えてくれた。他のグループからも、「日本人は相手の言葉を先取りして言う」や「相手の言ったことと同じことを繰り返す」などの意見があがり、先生から日本語は共話言語、ハンガリー語は対話言語だという解説がなされた。これには、日本人・ハンガリー人ともに納得した様子であった。僕自身も、初めて聞く表現ではあったが、腑に落ちる感覚を覚えた。

前述のように、日本への留学経験のある学生もいるがそうではない学生も話す力は相当なものであり、授業参加意識に差はみられず全員で授業を作り上げるという空気を感じた。

(3) 夜間日本語講座への立ち合い・見学

センターで開講されている講座は、総合・トピック・文化コースがあり、それぞれ形態は異なる。メインとなっているのは、入門クラス・G1~G5 クラスがある総合コースであり、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)をもとに構成されているクラスレベルに応じて日本語の体系的学習を進めている。総合コースでは1回90分の授業が週に2回ある(ハンガリー人講師と日本人講師が1回ずつ担当)。教科書には『できる』シリーズが主に用いられており、ハンガリー日本語教師会とセンターによって、ハンガリーにゆかりの強い日本企業の協賛を受けて作られたものである。CEFRに準拠したカリキュラムを達成するための構成になっていること、各課で「できる」ようになることが設定されており実践コミュニケーションを念頭に作られていること、単純な日本語教材ではなく日本ハンガリー相互の異文化理解を進められるようなコンテンツを通じての学習ができるようになっていることなどがコンセプトとなっており、独自性の高い教材になっている。また、Facebookのクラスコミュニティで宿題連絡やおすすめ教材の連絡が行われていたり、動画教材を事前視聴することで語彙・文法の予習を行い、そのうえで授業に臨むというスタイルも浸透していたり、e-ラーニング教材開発を進めている国際交流基金の強みが生かされている。

1週間を通じて、計8つの授業に立ち合わせていただき、授業内での会話アクティビティのパートナーを務めたり、生徒同士のアクティビティのチェックを行ったりした。ゼロ初級クラスの「準備」クラスから中級後期クラスの G5 クラスまで幅広い学習レベルの授業に参加したが、どの授業でも生徒が自主的に積極的に授業に参加し、双方向のやり取りでもって授業が行われている様子が感じ取れた。一方で、授業中に先生が全体に向けて問いを発すると分かっていそうなのに答えないなど周囲の雰囲気を読み合う空気を感じることもあり、ヨーロッパに位置しながらも日本でも見られる景色を経験し、ハンガリー人の自己主張の激しくない奥ゆかしい国民性を感じた。

ここでも、日本語の学習契機や講座の受講動機に関しては、日本のアニメマンガがマジョリティーを占めており、文化輸出の観点からこれらのサブカルチャーの役割の大きさを感じた。受講者も小学生からご年配の方まで幅広く、クラス内では年齢にかかわらずフラットに仲良く学び合う様子がみられた。中にはフランスからブダペストに来て日本語講座

を受けている人もいて、日本語学習の輪の広がりを感じた。

トピックコースでは、中上級者向けに日本文化からトピックを限定して短期集中で学ぶ。文化コースでは、実際に文化を体験しながら日本語能力も高める。このように、目的・レベル別に多様なコースが用意されている。

③研修先センター内日本語教育関連書籍管理に関する業務

センターには開架図書館があり、利用者はここから本を借りられるが、センター内講師室に備え付けてある日本語学習教材や日本文化についての専門図書も貸し出しサービスを行っている。しかし、この講師室備え付けの書籍は管理されておらず、在庫管理が煩雑になっていた。また、利用者も実際に講師室に足を運び自分でどの本が貸出可能か確認する必要があり、利用ハードルが高かった。そこで、書名/著者/発行年日/保有冊数をまとめたリストを作成した。作成したリストは、センターの HP 上で公開される予定である。

3. ブダペスト滞在に関して

街並み…石畳の道にレンガ造りの建物、くねった道の先には暖かいランプの灯り。ヨーロッパというイメージをそのまま体現したブダペストの街並みはその中にいるというだけで、気分が高揚してくるとても綺麗な街だった。ブダとペスト、元は2つの街だったドナウの両岸はそれぞれ違う雰囲気を持っている。ペスト側は観光地もあるが、ハンガリー国民・ブダペスト市民の経済活動の中心。中央市場以外にも市場がいくつもあり、市民の台所を支えている。また、ドナウ川沿いにある国会議事堂で政治が動く国政の中心でもある。オペラハウス、英雄広場、民俗博物館やいくつもの美術館など文化的な建物も多い。一方、ブダ側はブダペストの歴史を担っている。マーチャーシュ教会、漁夫の砦を含めたブダ王宮は観光のメッカであり、地元の人も訪れる心の休まる場所である。

平坦で近現代市民のペスト、起伏があり中近世貴族王族のブダ、橋でつながらなければ大河に分断される街はそれぞれのキャラクターを残しながらブダペストになっている。

食事…パプリカをふんだんに使った料理が多い。主な具材は、パプリカ、豚肉、牛肉、コイ、ナマズ、ニンジン、たまねぎ、鶏肉、ジャガイモなど。パプリカは生食用・加熱用・辛いもの・甘いもの・苦いものなど多種多様な品種が存在しており、スライス・ペースト・粉状で、どんな料理にも登場する食材であり、調味料である。代表的なハンガリー料理であるグヤーシュやハラースレーはいずれもパプリカベースのスープであり、前者は牛肉、後者は川魚がメインの具材である。煮る・焼く・揚げるはよく試される調理法だが、蒸す料理はあまり見かけなかった。レストランで夕食をとる場合は、飲み物にサラダかスープ、メインディッシュ、デザートという注文が一般的であり、小食の日本人がメインしか頼まないと変な顔をされる。

昼食は、オフィス近くのレストランで食べることが多かったが、ハンガリアンレストラ

ンだけでなく、ケバブやカレーなどアジアの料理がファストフード店舗的な感覚で利用されている。ディナーコースを持っているレストランでも、ランチコースが用意されている場合が多く、メインとサイドを割安価格で食べられるため、お得でありよく利用した。

ビールとワインがお酒としてポピュラーであり、パーリンカやウニクムといったハンガリー独自のお酒もよく飲まれている。特に、ワインは有名な産地・ブランドを国内にいくつも持ち、観光客のお土産としても好まれている。

デザートやお菓子は、レストランやカフェで食べられるスイーツだけでなく、屋台で売っている「クルトシュ・カラチ」が定番であり、町の大きな交差点には必ずと言っていいほど屋台が立っている。

買い物…水はボトル詰めのミネラルウォーターを飲むようにしていた。ピンク色のキャップがついているものが無炭酸。青や緑は炭酸入りの水である。"SPAR"や"prima"といったスーパーマーケットがいくつかあり、食料品から日用品までとりあえず事足りるはずである。ただし、小売店では夜は22時までが営業の基本であり、日曜は午前だけや休みが一般的であるのが日本との違いであり注意が必要。

通貨切り替えが数年前にあり、前の版は基本的に使えない。その場合は銀行の窓口にて無料で取り換えてもらえるので、その旨を伝えて紙幣を渡せばよい。番号札を取り、順番が来たら指定の窓口に行くのは日本と同じである。

言語…公用語はハンガリー語(マジャール語)であるが、英語も広く通じる。お店や観光地でのやりとりに問題が生じることは少なかった。ハンガリー人は親切であるため、もし言葉が通じなかったり、トラブルに陥ったりしても周囲の人が助けてくれることも多い。しっかりと自分の主張を伝えるとわかってもらえるものである。挨拶やお礼などのことばをハンガリー語でいくつか覚えておくと、アジア人に対する警戒心をほどいてくれるので便利でスムーズなことが多いと感じた。

移動…ブダペスト市内は公共交通機関網が発達している。地下鉄が4路線(うち1路線は工事中のため代替の路線バスが運行中)、路面電車(トラム)、路線バスが市内中をカバーしているので、それらに共通の期間内乗り放題パスを持っておけば行きたいところに行ける。ただし、不正乗車が発覚すると高額の罰金を支払わなければならないため、必ずチケットを携帯するか購入すること。

空港から市内に移動するには、交通機関を利用する必要がある。バスで専用の路線があり、これを利用するのが安いが、自分は miniBUD という事前予約性の乗り合いシャトルバスを利用した。事前にインターネットでフライトの到着予定時間と目的地(ホテルを指定した)を入力して予約。空港に着いたら到着ロビー内にある miniBUD 受付で予約番号が印刷されたチケットを発行してもらえる。モニターがあるので、そこに自分のチケット

番号が出たら荷物を持ってロビーを出てすぐ目の前の乗り場へ行く。すると、車両が迎えに来てくれ、荷物をトランクに仕舞い乗客がそろったら市内へ向けて出発。乗り合わせた人の目的地を順番に回ったり、人数がそろうまで自分の番が来なかったりとどのくらい時間がかかるかが読みづらいが、往復1,300円程度(2,800Ft)で自分のホテルまで確実に連れて行ってもらえるので精神的に非常に楽であった。帰りもホテルフロントにチケットを見せ、予約の確認をしてもらいたいと伝えると、miniBUDの事務所と電話で予約の確認をしてくれたので、チケットの時間通りにホテルの前で待っているだけで迎えが来て空港へ連れて行ってもらえた。タクシーより安く、公共交通機関より自分で考える必要のあることが少ないので、利用してみるのもいいと思う。

治安…日本と比べなければ非常に安全で大通りは安心して歩けると感じた。移民問題など で治安の悪化している地区はあるようだが、センターのあるペスト中心部や主要な観光地 は安心してよいと思う。とはいっても、西駅や東駅などの人の密集しやすい大きな駅周辺 は要注意である。

宿泊先とその周辺…国立オペラ劇場@Opera 近くのホテルに滞在。周囲の建物の多くがある程度のランクの観光客向けホテルであったことやオペラとイシュトバーン聖堂といったブダペスト観光の中心地近くであったことから静かに安心して滞在できた。立地と安心の意味から中程度のランクのホテルに 16 泊滞在して、12 万円(宿泊税込み)弱であった。前年度の参加者はゲストハウスに同期間滞在して 270 ユーロ(35,000 円程度)だったそうなので、何を優先するかで多くの選択肢があるといえる。

4. 今回のインターンシッププログラムに参加して個々の目標に関しての感想

①事務所での就業活動を体験することで、「働く」ということはどういうことなのかを体験し、就業体験中に課されるタスクをこなす中で自らの能力や適性を客観的に認識し、これからの就職活動・キャリア形成の指針となる材料を見つける。

ブダペスト日本文化センターは、日本人スタッフ4名・ハンガリー人スタッフ4名・併 設図書館の司書アルバイトスタッフ1名の小さな事務所である。そこに一員となるべく飛 び込んでいった二週間で得たものは大きく、そして幅広いものであった。

今回の就業体験では、補助的な役割を任されることが多く、また自分一人に任された仕事とセンター全体として動いている仕事とのバランスをとるのが難しく、その配分に余計なエネルギーをとられてしまった印象が強い。これはそのまま自分が大学を卒業して社会に出ていった時のシチュエーションに近いものであるはずであり、つまり自分が社会に出て最初に直面するであろう課題を先取りして経験できたということである。タイムマネジメントやマルチタスクといったワードは事前オリエンテーションのなかで出てきてはいたけれど、言葉として意識するのとそれを実際に達成することの違いに2週間かけてようや

く気づけた。これは、「働く」という言葉に具体的な肉付けをすることを目的の一つに掲げていた自分としては、収穫としていいことだと思っている。

②中東欧地域における日本・日本文化・日本人の占める位置をさぐり、世界における日本人の姿や客観的評価について実際の声を通じて視座を得る。

中東欧は日本からすると心理的な距離が遠い地域である。そのせいか日本に対する中東欧地域からのまなざしにも日本人は鈍感になってしまっている気がする。しかし、世界的に日本の存在感というものは一定量あって、中東欧地域も例外ではない。そのことに気づけたことは成果であったと思う。日本語講座や立ち合い業務の中で関わったハンガリーの人々の言葉の端々から、彼らにとって(僕らからすると世界にとって)日本とはどういう存在なのか教えてもらったことが自分の考えの幅を広げてくれたように感じていることから、他者からのまなざしや客観的評価に自覚的であるかどうかは今後のグローバル社会を生き抜き、活躍する重要な能力であり、忘れてはいけないと感じた。

③日本文化交流の最前線たる語学講座や文化紹介事業への参加を通じて、異文化受容・ 理解の積極的な姿勢を直接目にすることで、多文化共生社会の条件を考える。

どのイベントでも、日本語教室でも参加する人は生き生きと自分のやりたいことを楽し み、成長を実感していた。それを近くで見ていて感じたのは、他者・異文化に対する興味 が喚起されるのはそれほど難しいわけではなく、むしろそれが持続し発展していくのかど うかが一つの関門であること。そして、その学ぼうとするのと同じくらい受容される側も 他者による理解・需要に関して積極的な役割を持っているように感じた。多文化共生とい う言葉が想定する世界を実現するかの決定権は受容される側にあるのではないか、という のは今回の研修を通して得た新しい問いである。研修中の関わりの中で、日本語が発展途 上の人とたくさん言葉を交わした。もちろん、こちらを好いて理解・習得のために時間を 割き、それを楽しんでもらえているのは嬉しかったし、前述の通り日本の見られ方を教え てもらえたのは他では得られない経験であった。だが、発展途上ということはすなわち正 しい理解を伴っていない場合や言葉の誤用もあるわけである。当然すぎることなのだが、 それでも反射的に違和感や反感を覚えてしまった。相手に悪意がないなんて当然のことが 頭ではわかっていても、これが積み重なるとどうしようもない対立に繋がり、相手を拒絶 することになってしまうのも理解できそうになったのも事実である。文化的な対立の一因 を体験してしまったのは、喜べることではないがこの研修で得た成果であることもまた事 実である。決してポジティブではない思いを自分の中に感じたことで自分自身の幅が広が ったといえるのではないかと考えている。今後は、その感情との向き合い方を学び、前向 きに実践の方法を考えていけるようにしたいと思っている。

5. 最後に

楽しい2週間であった。あらゆることが初めてであり、経験や感じたこと一つ一つが時間をおいてからなおその重みを増すような時間であった。これからの大学生活やキャリア形成、ひいては社会・人との向き合い方を教えてもらった、そんな風に思っている。2回生という早い段階でこのような機会をいただけて本当に光栄である。応募の段階から帰国後まで細かく連絡をくださりサポートしてくださった国際交流課の方々、インターンシップやハンガリーという言葉に浮足立つ僕に現地で見るべきものを提示してくださった諸先生方、そして社会経験のない若造を温かく迎え、贅沢な経験を惜しみなくさせてくださった所長はじめブダペスト日本文化センターのスタッフのみなさんとブダペストの優しい人たちに心からの感謝をしています。ありがとうございました。













